

文学部創立50周年記念行事 学生記念シンポジウム 「私たちは文学部をこうしたい！」 2001年6月23日(土)

発表者

佐々木智恵美 菊池 慧莉

調査担当

小野寺 祥子 田中 麻紀子 佐藤 ゆみ
石川 大輔
三野輪 彰紀 (社会学科社会学コース2年)

私たち文学部生は、今回、文学部創立50周年を迎えるにあたり、その記念行事の一環として、「学生記念シンポジウム」を実施することになりました。

そこで、シンポジウム実施に向けて、その調査グループの代表として任命された私たちは、文学部創立50周年のメインテーマである「人間を知り、新世紀を創る」を念頭に、「文学部生の意識と行動に関する質問票調査」という題名で調査を実施することにしました。調査の対象は大学生活を一年過ごしてきた2年生全員とし、調査を実施する



にあたっては、園田茂人教授に指導していただきながら、質問票の内容の吟味から印刷、配布、回収、データの入力に至るまで全て学生の手によって行いました。3週間かけて質問文を練った後には、いよいよ調査開始です！今年の5月21日(月)から6月1日(金)までの12日間をかけ、2年生必修授業の基礎演習(3)の担当教員にもご協力いただき、33クラス全てに質問表を配布、回収しました。配布者数およそ1,000人。回収サンプル数は891件でした。思いのほか、回収率は良かったと考えています。そして、おおよそ次のような調査結果を得ました。

①授業に関する質問

「一番真剣に取り組んだ授業」は「専攻科目」(47.9%)となっており、以下の「外国語科目」(18.8%)「共通科目」(13.3%)を大きく引き離しています。また、その理由としては「授業内容に興味があったから」が64.9%と圧倒的でした。

②学生生活に関する質問

「部・サークルに所属している人」が7割弱、その中で「部・サークルが大学生活に占めるウェイトが大きい」(62.8%)、「部・サークルの人間関係に満足している」(66.4%)と課外活動としての部・サークルが重要な意味を持っていることがわかりました。

③愛校心に関する質問

中大生としてのアイデンティティー、愛好心を感じる機会として、「テレビで箱根駅伝を見た」(75.5%)、「野球やラグビーなどの大学対抗戦を観戦した」(5.5%)、「白門祭に参加した」(54.2%)、「ウォーキングラリーに参加した」(2%)中大校歌のCDを聞いたことがある(21%)となっています。

④施設の利用に関する質問

よく利用する施設の上位が「生協」(74.4%)、「学生食堂」(70.3%)であり、全く利用しない施

設の上位が「学生相談室」(95.2%)、「保健センター」(79.5%)となっています。特に問題視すべきことは各専攻・コースの共同研究室(全く利用しない:66.4%)やパソコン教室(全く利用しない:50.3%)のように、学部教育と大きな結びつきがある施設があまり利用されていないことです。その理由については残念ながら今回の調査では得られていません。

さて、ここで私たちは今回の調査結果を踏まえて、6月23日(土)開催の「学生シンポジウム」に向けての具体的提案のまとめにはいりました。

調査結果からまず言えることは、中央大学における学生生活に満足している人は半数以上であったこと。それは、サークルに所属している人ほど満足度が高く、またサークル内の人間関係に満足している人ほど学生生活に満足していました(結果②より)。

この結果をもとに私たちは、“授業に対する満足度を高めるためにはサークル的な要素を取り入れる必要がある!”と、考えました。サークルの利点として挙げられるものは、a. 選択可能である b. 強制ではなく、意欲次第で参加が可能である c. 活動を通して友達との絆が深まるという3点です。そこで私たちはまず、

1. 「参画型授業の増設」

2. 「基礎演習を後期に設け、選択可能にする」

という2点を提案しました。現在の基礎演習は入学した時点ですでに担当教員が決まっており、当然ながら担当教員によって授業内容が違います。自動的に与えられたテーマにより学習をするわけですから、やはり興味がもてなかったり、意欲がわかなかったりといった事態は当然ながら起こります。“ゼミこそ私たち自らが学びたいものを学ぶ”が、気持ちとしてあります。選択可能にすれば学生の意欲を促すことができ、興味のある分野であればまじめに取り組むことができます。また、仲間と協力して研究することで、友情を深めることができるのではないのでしょうか。

次に、中大への帰属意識について分析してみると、中大に愛校心がある人(結果③より)は、部やサークル(特に運動系)に所属していることがわかりました。これは、前述したように白門祭、対抗試合、中大CDについての結果が顕著に示しているように、部・サークルに所属している人と、そうでない人の差が歴然としています。そして、大学生活に満足している人は大学施設の利用が多く、このことに関しては共同研究室の利用についての結果からも明らかです。これらの分析から“部やサークルに参加している人の多くは、愛校心が高く、大学生活に満足している”ということと、“大学生活に満足している人の多くは大学の施設を利用している”ということがわかりました。

以上の分析結果から、大学や学部への帰属意識を高め、大学生活を満足したものとするために、提案2で出たサークルの利点を生かし、学部教育に対する提言の3点目として、

3. 「学部(専攻・コース単位)規模でのイベントを行う」

ことを挙げました。イベントとは具体的には、白門祭を学部規模にした、全員参加の文学部祭です。専攻・コースまたはクラス単位での参加にしてスポーツ、クイズ、スピーチなどのさまざまな部門を設け、それぞれの合計点を競うゲーム方式にします。このようなイベントを行うことによって、クラス、学科、学部のつながりが強くなり、帰属意識、愛校心が高まるのではないのでしょうか。またお互いの人間関係が深まることによって、授業の出席率や学問への意欲が増し、施設の利用にもつながります。そして、学生生活に活気が生まれ、大学生活への満足度もあがるでしょう。そう、

「私たちは文学部をこうしたい!」とつねづね思っているのです。

以上私たちが挙げた3つの提言に共通するキーワードは『参加』です。学生自らが参加することによって、満足した大学生活を送ることができ、そのことが文学部の発展へとつながるものと思います。

このような調査をしたのは今回が初めてで、とても大変な作業でした。しかし、予想と異なった結果も多く、新鮮な驚きの連続でした。今回の経験をもとに、これからも私たちの文学部をより良くしていくために、いろいろなことに積極的に取り組んでいきたいと思えます。

以上